国際委員会だより 第62回

Message from International committee

建設コンサルタント海外奮闘記

～地方で培った技術力を基に、地方から世界に挑む～

国際委員会　佐々木 和嘉　｜　SASAKI Kazuyoshi

はじめに

海外業務は東京拠点で実施されていることが多い中、地方で海外業務に奮闘している方々がいます。今回はパシフィックコンサルタンツ株式会社で大阪・九州を拠点にして海外業務に従事する技術者に座談会形式でお話を伺いました。

参加者紹介

主に国内業務に従事しながら海外業務に挑戦	
	大阪　畠中 誠司 都市計画や地域振興に関する案件に長年従事。その経験を活かし、3年前にヨルダンの都市開発マスタープランに携わる。
	大阪　野中 良子 まちづくりやまちの拠点的施設の構想・計画～ PPP事業等に従事。令和6年度、入社以来念願の海外業務でパラオに渡航。
	九州　片山 悦治郎 前職でサンゴ保全の業務に従事。マダガスカルで現地調査を行い、サンゴ保全マニュアルを作成。
	九州　塚田 豊 防災系の地盤業務を専門とし、現在、外資系企業の太陽光発電の斜面防災業務に従事。
	九州　金子 幸司 設計から計画まで建設コンサルタントの枠にとどまらず活動。過去にタイのプロジェクトに２度参画。
	大阪　山口 果那 まちづくりと風力発電業務に従事。グリーンインフラの海外展開やベトナムの洋上風力発電開発に携わる。
	大阪　堀江 崇之 橋梁設計に長年従事。JICA案件で初めて海外業務に携わる。
地方転勤後も引き続き海外業務に従事	
	大阪　長谷川 美佳 アジア・アフリカのインフラ付帯設備・エネルギー案件に従事。年間2/3程度は出張により海外勤務。
	九州　荒川 靖子 東京の国際部門より異動。現在も福岡にて海外案件業務に従事。
	大阪　辻尾 大樹 アジア、アフリカ、大洋州、中米等の海岸・港湾案件に従事。ワークライフバランスのため東京単身赴任から大阪へ帰還。

畠中：入社以来、大阪で国内業務に従事し、3年前までは海外業務に関わるとは全く思っていませんでしたが、「全社グローバル化」の会社方針もあり、ヨルダンのプロジェクトに2年間携わりました。海外と日本の違い、日本らしさを考えながら仕事をすることで、これまで以上に国内業務に付加価値を高められると感じました。

野中：地方では、東京と比べると少ない人数で業務を担っていて、専門分化が進んでおらず、幅広い業務に携われます。海外業務は幅広い分野での知識が求められ、適応力や柔軟性が必要である点が地方業務と似ているため、地方業務の経験が活かせます。日本では計画的に仕事をすることが前提となっていますが、海外では渡航中にできる限りの業務をする必要があります。また、その場で柔軟な判断を求められることが多く、業務経験を積んでいないと難しいと思います。

長谷川：海外業務に従事する人材の地方勤務が増えつつあります。海外業務の発注者は東京に多く、大阪発での海外案件形成は難しいですが、関西に大きな企業は多く、民間連携等の可能性はありそうです。

片山：以前、海外でサンゴ保全に関わる論文発表をしました。英語は得意とは言えませんが、なんとかなったという経験があります。声がかかったらできる限り海外業務に対応したいです。

塚田：まだ東京中心ですが、海外の災害復興案件が増えてきています。東日本大震災、熊本地震、能登半島地震などの防災系業務に従事してきたので、経験を展開できるいい機会です。外資系日本法人が太陽光発電施設を開発する際の斜面防災業務もあります。

荒川：元々海外業務に従事していましたが、家族の都合で九州に来ました。海外業務でオンライン慣れしているので、地方での海外業務も違和感なくできています。自治体業務の中でも、海外の先行事例調査が仕様に入っているものがあるので、東京の国際部門と連携して強みを活かしたいです。

海外業務の関わり方（「なにわGlocal People」作成資料を一部改変）

レベル	国内で出来る業務
レベル１	省庁発注の海外業務、JICAプロジェクトの部分的なお手伝い・会議参加（全体の流れを理解）
レベル２	省庁発注の海外業務・JICAプロジェクトの提案書作成、国内で実施できる業務を分担
レベル	**海外渡航を伴う業務**
・渡航手続き、現地での口ジ(Logistics)=業務調整、自分の英語力を体験 ・具体的には、出張稟議、各種手配（保険、航空券、ホテル、車両、SIMなど）、（現地事務所立上げ）、現地通貨払、自社管理部門への報告 ・現地政府の行政機関等とのアポ取り・コミュニケーション	
レベル３	省庁発注の海外業務担当者またはJICAプロジェクト担当者（自社負担）として海外渡航 （担当者は1人ではなく、調査団内で責任分担が可能）
レベル４	JICAプロジェクト担当者（正式団員）として海外渡航 （担当者が一人なので責任が重い）

マラウィでの技術協力（長谷川氏提供）

金子：海外業務経験は、現地渡航し、通訳なしで英語だけの会議に出席し回答を求められるような業務だったので、海外業務に対する恐怖心がないとは言えません。しかし、最近は海外業務に従事する人材の九州異動があり、周囲の技術者を含め海外業務への抵抗感が薄れてきています。国内業務で技術を磨いている技術者を海外業務にうまく繋げていきたいし、若い人にはぜひ海外業務を経験してほしいです。地方は人が少ないですが、分野の壁が低く、他分野の技術者に声をかけやすいという強みがあります。

山口：入社3年目にベトナムの洋上風力発電事業に向けた風況調査手法を検討しました。海外の新規分野ということで不安は大きかったのですが、度胸、柔軟性、適応力が鍛えられました。また、グリーンインフラの海外展開に関する調査業務でベトナムとタイに渡航し、調査の先にあるプロジェクト形成の難しさを実感するなど、新たな気づきがあり、視野が広がっています。海外か国内かといった場所にこだわらず、どこでも通用する技術力を身につけていきたいです。

堀江：JICAの本邦研修にて、橋梁の劣化メカニズム・補修方法、橋梁点検方法について同時通訳で講師を務めました。講習後は民族料理を食べながら交流を深めることができ、普段とは違う刺激を受け、今後も海外案件に携わりたいと思いました。

辻尾：世界から見れば東京も大阪も福岡もずいぶん近いので、働きやすい場所、どこからでも参加できる柔軟なワークスタイルを推進していきたいです。また、自身も大阪オフィスの国内業務に参画することで、技術力を磨き直すいい機会が得られています。

片山：地方は人が少ないので、海外業務を担うことによって確実に売上が計上される仕組みや、海外出張により国内業務が止まらないような業務シェアリング体制の構築が重要です。

地方での取り組み「なにわGlocal People」
海外業務に従事する地方人材育成のために、畠中氏が、海外業務に関心のある技術者に呼びかけ、意見交換やアンケート調査、懇親会などを実施。現在大阪中心に30数名が参加。海外業務への関わり方にはさまざまなレベルが考えられ、各人が可能な範囲で関わっていくスタイルを提案している。

野中：私は、何度か「海外業務の関わり方レベル1～2」で海外業務のサポートを経験した後、パラオ業務で初めて提案書から携わり、渡航しました。国内業務の関係者には事前に話をしていたので影響は最小限で済んだと思っています。一方で、海外現地で国内業務の対応もできる想定でしたが、現実的には厳しかったです。

畠中：「失われた30年」と言われていますが、実際には誠心誠意働いてきました。今後は内向きでは日本は回復できないでしょう。国際感覚やグローバルな情報をローカルな形に落しこんでいくことが重要であり、そこに海外業務経験の意義があります。日本は地方の衰退、過疎化が著しいですが、本質的な豊かさは地方にあると思っています。地方の技術者として、国内で活躍しているフィールドと海外との接点をどう見出すかが重要です。

おわりに

今、日本への観光インバウンドが人気です。世界中が日本のまちづくりや、都市インフラを賞賛しているわけで、それらは日本の建設コンサルタントが支えてきました。しかし、これらの素晴らしい技術を海外に上手に売り込めているとは言えません。

海外業務は、海外専門組織だけだと技術力不足に陥りがちで、日本国内で技術力を身につけた人材へのニーズがあります。国際委員会は、地方において幅広い業務を経験した技術者の海外業務への挑戦を支援します。